

子ども時代、子どもであること

武藤 剛史

はじめに

文学・芸術の観点から見て、子ども時代には、また子どもであることには、いったいどんな意味があるのか。この問題について、おもに二十世紀フランスのふたりの作家、ジョルジュ・ベルナノスとサン＝テグジュペリの証言および作品を通じて考えてみたい。

言うまでもなく、多くの作家が自分の子ども時代を描いているし、子ども時代こそみずからの文学創造の源泉だと証言している作家も少なくない。二十世紀フランスの作家に限ってみても、プルースト、コレット、ジロードウー、ラルポー、ジュリアン・グリーン、アンリ・ボスコなどの名がすぐにもあがってこよう。たとえば、アラン・フルニエはつぎのように述べている。

ぼくの芸術と文学の信条、それは子ども時代だ。子ども時代を、いかなる幼稚さをもまじえず、ほとんど神秘にも近いその奥深さをそなえたままに、表現すること。(1)

ベルナノスもつぎのように述べている。

わたしの著作のよい部分は、はるか遠く、わたしの青春時代と子ども時代から、子ども時代の深い泉からもたらされたものだ。⁽²⁾

だが、ペンを手に取るとすぐにもわたしの心に浮かんでくるのは、わたしの子ども時代のことなのだ。誰にでもあるような、ごく平凡な子ども時代だが、それが涸れることのない夢想の泉でもあるかのように、わたしは書くことのすべてをそこから引き出してきた。⁽³⁾

そしてサン＝テグジュペリ。

子どもどものとき以来、ぼくはほんとうに生きていると実感したことはないような気がします。⁽⁴⁾

子ども時代の思い出の世界は、いつになっても、ほかの世界よりもはるかに真実な世界だと、ぼくには思われることでしょう。⁽⁵⁾

さらにアンドレ・ドートルの証言を加えたい。

〔詩人の心のうちには〕消すことのできない悔恨が潜んでいるが、その悔恨とはじつはひとつの感嘆の念の裏返し表現なのである。その感嘆の念は、わたしたちが子ども時代に抱いていた確信、すなわち、いかにも壊れ

やすいこの世界が永遠の相を帯びていたあの時代に抱いていた確信に由来する。「…」ともあれ、わたしたちが今なお子ども時代の力を感じていること、そしてわたしたちが永遠のなかに生きていたあの時代のことを詩人はけっして忘れないだろうということ、それは確かである。⁶⁾

時代は異なるが、ボードレールもまた、「天才とはつまるところ、意のままに取り戻される子ども時代である」と言っている。

それにしても、これらの作家たちは、どうしてそれほどまでに子ども時代にこだわるのか。彼らに言わせれば、子どもの世界にこそ人生の真実は潜んでいる、子どもであることこそ人間の真のあり方である、ということになるだろうが、いったいどうしてそのようなことが言えるのか。

子どもと大人

子どもであるとは、言うまでもなく、大人であることの対概念である。子どもであるとは、また大人になつていないということである。

大人であるとは、もちろん程度の差はあるが、一人前の人間になることである。それなりの経験を積み、知識と能力を身に着け、自覚と責任を持ち、自立した人間として社会生活を営むことができるようになること。子どもは、大人が望むと望まざるとにかかわらず、いずれ大人にならなければならない。

大人であることを基準にすれば、子どもであることには、マイナスの要素しかない。まず、子どもはひとに頼らなければ生きていけない弱い存在である。体も小さいし、力もない。経験に乏しく、知識も少ない。自覚や責任感が薄く、精神的にも自立していない。仕事にも就けないから、生活力もなく、自活できない。大人の目からすれば、

子どもは役立たずで、半人前あるいはそれ以下であり、大人のお荷物ではない。そこで大人たちは、子どもたちに向かつて、早く大人になれとしつこく言い続ける。

ところがベルナノスは、ひとりの少女に向かつて、つぎのように言っている。

詩人たちに忠実でありなさい、そして子ども時代に忠実であり続けなさい！ けっして大人にはならぬことです！ 子どもたちにたいして、大人は陰謀を企てます。福音書を読めば、それがよく分かります。神さまは、枢機卿に、神学者に、評論家に、歴史家に、小説家に、そして万人に、「子どものようになりなさい」と告げている。それなのに、枢機卿、神学者、歴史家、評論家、小説家たちのほうでは、幾世紀ものあいだ、裏切られた子どもたちに向かい、「われわれのようになるのだ」と、飽かず繰り返しているのです。^⑤

ここでベルナノスが言わんとしているのは、大人になることによつて、わたしたちは人間の真実を裏切ってしまう、子どもたちだけが、そして、かつて自分が子どもであったことを忘れない詩人たちだけが、その真実を知り、またそれを生きることができるといふことであろう。

ここで思い出されるのは、『星の王子さま』の献辞に書かれたつぎの言葉である。

おとなだつて、はじめはみんな子どもでした。でも、それを忘れずにいる人は、ほとんどいません。^⑥

同じような言葉は、作品の本文中にも、いたるところに見つかるだろう。

おとなというものは、自分たちだけではけっしてなにも分からないから、子どもはいつもいつも説明しなくてはならず、まったくいやになる……^(m)

子どもたちは自分の知っている真実を大人たちに伝えようと思うのだが、どうにも伝えることができず、やがてあきらめてしまう。そのうち、自分も大人になり、かつて子どもであったことも忘れてしまうから、子どものときに知っていた真実、自分自身が生きていた真実も忘れてしまうのである。

では、子どもだけが知っている真実、子どもだけが生きること許されている真実とはいったい何か。それを知る手がかりのひとつは、大人になる、大人であるとはいかなることかを考えることであろう。

大人になるとは、さきにも述べたように、一人前の人間、つまり誰の助けも借りずにひとりで生きられる人間になることである。もちろん、大人になったところで、じっさいには誰の助けも借りずにひとりで生きることなどできるはずはないのだが、建前としては、周囲からもそのようにみなされるし、また自分もそのように自覚せざるを得なくなる。一言でいえば、自立の意識を持つということである。自立すること、自分の力と自分の意志だけに頼って生きること。

大人とは、以上のように、自立した人間、自分の力によって生きていると考える人間、要するに自分を絶対の主体とみなす人間である。かくして絶対の主体となった人間にとって、自分以外のすべてのものは外部の対象となり、それによって自己対他者、自己対世界という二元論的世界が成立する。しかも、ここでいう他者、そして世界とは、あくまで主体である自己の対象、自分の利害、欲望、関心にかかわるかぎりにおいて存在する対象ではない。

この二元論的世界は、あくまで人間が絶対の主体となることによって（じっさいには、自分を絶対の主体と思ひ込むことによって）成立する世界にすぎず、それゆえ世界のあり方のひとつでしかないのだが、大人たちは、それ

を世界のあるがままの様態、つまりは客観的世界であるとみなす。もちろん、日常生活・社会生活において、これを客観的世界とみなしてまったく不都合はない、というよりも、この世界を万人共通の客観的世界とみなさなければ、日常生活・社会生活は成り立たない。わたしたちは誰も、少なくとも大人として生きていくかぎり、自分を絶対の主体とみなし、また絶対の主体として生きていくからである。わたしたちが普段生きている日常生活・社会生活とは、絶対の主体としてのわたしたちの欲望に何とか折り合いをつけつつ、それを最大限に満たし合うべく形成されたシステムにほかならない。それゆえ、日常生活・社会生活を営むうえで、わたしたちが絶対の主体であることに何の不都合もない、というより、絶対の主体であることを強いられている。わたしたちが普通、自分を絶対の主体であることを疑わないのも、また、おまえは絶対の主体ではないなどと言われたら、誰もが激しく拒絶反応を示すのも、それゆえである。

以上のように、大人になるとは絶対の主体になることであり、絶対の主体になるとは、自分は自分によって存在する、自分自身が自分の根拠・根底であるとみなすことである。それはおのずから、自分の背後ないし上位には何も存在しない、つまり超越者は存在しないと考えること、言い換えるなら、自分は在らしめられているので、生かされているのでもなく、もともと自分として存在していると信じていることである。絶対の主体としての自己は、かくして世界の原点となり、この世にありとあらゆるものは、この世界の原点である自己の対象となる。自分という存在、自分のいのちさえもそうであり、それゆえ、自分という存在、自分のいのちもまた、絶対の主体としての自己の所有物にほかならない——「おれの体、おれの命はおれのものだ。どうしようと、おれの勝手ではないか」

ベルナノス

そうであるとすれば、子どもだけが知っている真実、子どもだけが生きること許されている真実、大人になる

ことによつて失つてしまふ眞実とは、まさに自分が在らしめられている、生かされているという眞実である、と推測することが許されよう。

そもそも、子どもとは大人との対概念であると同時に、親との対概念でもある。もちろん、親とは直接的には肉親である父母を指すが、さらに大きく見れば、自分を在らしめ、生かしている何者か、たいていは神という言葉で示される存在も親であろう。というよりも、それこそほんとうの親であろう。人間は何よりもまず〈神の子〉なのである。

ベルナノスの小説『田舎司祭の日記』に登場するトルシー神父はつぎのように語る。

「幼い子どもの頃が、あれほどなつかしく輝いて見えるのはどうしてだろうか。子どもにもみんなと同じように苦しみはあるし、また子どもは苦痛や病気にたいしてまったく無防備だと言つていい。幼年期と最晩年は、人間のふたつの大きな試練のはずだ。にもかかわらず、自分が無力だという意識こそ、子どもの喜びのつましやかな源泉なのだ。子どもは母に頼りきっている。分かるだろう。現在も、過去も、未来も、人生のすべて、生の全体が、ひとつの眼差ししなかにある。そしてその眼差しは微笑だ」⁽¹¹⁾

幼い子どもは無力である。無力さは、苦しみや病気にたいして、さらには他者や社会の悪にたいして、子どもをまったく無防備にする。だとすれば、子ども時代は、最晩年とともに、人生の大きな試練のほずではないか。それにもかかわらず、子どもは、みずからの弱さのなかに、喜びのつましやかな源泉を見出す。無力さゆえに、子どもは母に頼りきつて生きているが、そのように母を全面的に信頼して生きること、現在も、過去も、未来も、要するに人生のすべてを、母の優しい眼差しにゆだねきつて生きること、まさにそこから、子どもの限らない喜び、純粹な

幸福感は生まれる。

もちろん、子どもの全幅の信頼に応え、子どもの生の全体を守り、支えることは、母たるものの切なる願いではあっても、現実の母にはとうていなし得ることはない。そうした意味において、子どもは母の全能性の幻想のなかに生きていると言ってもよいかもしれない。けれどもここで重要なのは、母の全能性にたいする信頼が錯覚に基づくものか否かということではなく、母を信頼しきって生きることに、自分の全人生をそっくり母の眼差し、母の微笑にゆだねきって生きることに、そのこと自体なのである。そうした生のあり方そのものから、子どもの限らない喜び、純粹な幸福感は生まれる。

それにしても、そのような子どもの生のあり方から、どうしてそうした喜び、そうした幸福感が生まれるのか。ベルナノスによれば、その答えはひとつしかなく、しかもそれですべては言い尽くされている。その答えとは、わたしたち人間は〈神の子〉であるということである。神によって創造され、たつた今も神によつて在らしめられ、生かされている人間は、そのような存在として、神にすべてをゆだねて生きるということが（そしてそのことだけが）、真の自己として全き生を生きることを意味する。母に頼りきり、信頼しきって生きる子どもは、みずからは自覚せずとも、そうした〈神の子〉としての生を生きていることになるのだ。トルシー神父は、さきに引用した箇所にかけて、つぎのように語る。

「ところで、君、もしわたしたち司祭にすべてをまかせておいてくれたなら、母なる教会は人間にそのような至福の平安を与えることができたろう。もつとも、それによつて、各人が味わねばならない心配や苦勞が少なくなるというわけではないがね。飢え、渴き、貧しさ、嫉妬、そういった悪魔を手玉に取るほど、わたしたちはけつして強くなれまい。そうだろう！ だが、人間は自分が神の子であることを知ったにちがいない。それ

こそ驚嘆すべきことだ」(12)

大人になり、強くなり、絶対の主体となつた人間が忘れてしまうのは、まさに人間は〈神の子〉であるという真実である。大人たちは、強く、絶対の主体であることを自負するがゆえに、自分は自分の力で生きていくと信じ、自分以外の誰か(何か)によって生かされているという事実を否定する。かくして大人たちは、神から離れ、それによつて〈神の子〉としての本来的なあり方を見失つてしまう。それゆえ逆に、自分が〈神の子〉であることを知り、また〈神の子〉として生きるには、まさしく子どものような弱さ、貧しさが必要なのだ。そうした〈子ども〉の心々をみごとに体現しているのが、『よろこび』のシャンタル・ド・クレルジュリである。

いかなる王侯にもまして豊かな主の御手のなかで貧しくあることに、誰が不安をいだくだろうか？ 彼女がひとにそれを打ち明けるはるか以前から、あるいはまた、それをはつきり意識することができ以前ですら、その貧しさ、超自然的で根源的な貧しさは、小さな親しい星、変わらざる優しい微光のように、彼女の子ども時代のうえに輝いていたのだ。どんなに過去をさかのぼってみても、自分自身の弱さの甘美な意識は、彼女をこのうえもなく力づけ、慰めてくれた。なぜなら、その意識は、彼女のうちで、神の現存の、つまりは彼女の心のなかで輝く神ご自身の、えもいわれぬしるしのように思われていたからである。(13)

ここでいう神の現存とは何を意味するのか、言い換えれば、神はいかなる形でわたしたちに働きかけるのか。それはほかでもなく、わたしたちに存在といのちを与える働き、すなわち創造を通してである。神はたった今の一瞬ごとにわたしたちを在らしめ、生かしているのだ。シャンタルはつぎのように言う。

「わたしにどうしろとおっしゃるんですか？ わたしに選ぶことができるでしょうか！ そんなことはできません。わたしは、神さまがくださる毎瞬をお受けします。だって、それを拒む力はわたしにはないんですもの。むかし、寄宿舍で、土曜日の晩に、その週の評価が読み上げられるのを聞いていたときのように、わたしは目を閉じて、その一瞬一瞬をお受けするんです。それから目を開いてみて、この瞬間もまた自分を生かしておいてくれた、今度も無事に済んだって思うんですわ」⁽¹⁴⁾

だが、神がわたしたちに存在といのちを与えるとは、すなわち、神が神自身をわたしたちに与えるということである。というのも、神とは〈存在〉そのもの、〈いのち〉そのものであり、したがって神の創造とは、神がみずから与える愛の業にほかならない。

愛とは自由な選択であって、さもなければ、何もでもない。「∴」神は愛であり、〈創造〉とは愛の業である。⁽¹⁵⁾
 そうであるなら、わたしたちが生きているということは、もともと、神∥愛のなかにあるということである。『田舎司祭の日記』の青年司祭と伯爵夫人の対話を示しているのも、まさにそのことであろう。

「愛は死よりも強いと、あなたがたの本には書いてあります。——愛を発明したのはわたしたちではありません。愛には愛の秩序があり、愛の法則があります。——神がその主でいらっしゃいます。——愛の主ではありません。愛そのものです。あなたが愛そうと思われるなら、愛のそとに身を置いてはなりません」⁽¹⁶⁾

「地獄というのは、奥さま、もう愛さないことなのです。もう愛さないというと、あなたがたの耳には聞きなれた文句のように響くでしょう。もう愛さないというと、生きている人間には、まえほど愛さないとか、べつのもを愛するというだけのことなのです。でも、わたしたちの存在、わたしたちの存在そのものと、切っても切れないものに見えるこの能力が——理解することもひとつの愛し方です——消え去るようなことがあるとしたら？ もはや愛さず、理解せず、それでも生きているとは、まさに奇跡です！」⁽¹⁾

わたしたちの存在がもとも愛のなかにあるとすれば、わたしたちが愛を見失うこと、愛のそとに身を置くということは、本来ならば、わたしたちの存在そのものがただちに消え失せることを意味するはずである。だがじつさには、大人になることによつて、ほとんど不可避的に愛を見失い、愛のそとに身を置くことになるにもかかわらず、わたしたちは何ごともなかつたように存在し続ける。この奇跡にこそ、人間の深い神秘が潜んでいるように（それは、〈神の似姿〉である人間に与えられた根源的自由、つまりは絶対の主体であり得るという自由と、またその根源的自由ゆえに犯さざるを得なかつた原罪、つまりはほんとうに絶対の主体になつてしまつたということ、深くかかわる問題であろう）、そのように愛のそとに身を置いて生きるとは、わたしたちの生の本来的なあり方から離れた、ほとんど非在の生、虚妄の生だと言わねばならない。それはまさしく地獄であり、しかもそれが、おおかたの人間が生きている生なのである。

「……」 怒りや憤りが空しいものであり、愛し得ないものは無に等しいことをわたしは認める。ひとはすべてを愛することができるといふのも、神は、苦悩に満ちたあわれなその被造物の飢えや渇きをさえ紛らしてやろう

とお思いにならなかったのだから。神の被造物が愛し得ないものは、無である。壁にぶつかるとして、わたしたちがそれにぶつかっていく虚言など、何の手ごたえもない闇という壁にすぎない。それは、愛によつてすら、光のもとに返し得なかった虚無の部分、闇の部分である。わたしたちが子ども時代を振り返り、生きることにではなく、これまで生きてきたことに倦み疲れ、遠くから呼びかけると、それはやさしい声でこう答える——「この世には、ただひとつの誤りと不幸しかない。それは惜しみなく愛するすべを知らないことだ」⁽¹⁸⁾

ただ子どもだけが惜しみなく愛するすべを知っており、それゆえ、子どもは勞せずして神の愛のなかに生きることが出来る。ベルナノス唯一の劇作品『カルメル会修道女の対話』において、修道院に入ったばかりのブランシユに、院長はつぎのように言う。

「ひとつひとつの祈りが、たとえそれが羊の番をしている羊飼いの子どもの祈りであっても、全人類の祈りになり得るのです。(短い沈黙) 羊飼いの子どもはときたま気の向いたときにしか祈りませんが、わたしたちはその祈りを昼も夜も続けなければなりません。けれどもそれは、わたしたちが羊飼いよりもよく祈れるよう願うことではないのです。その逆です。羊飼いの魂の素朴さ、主にすべてをゆだねる愛は、一瞬の靈感であり、恩寵であり、天才のひらめきのようなものであって、わたしたちは、一生を捧げて、それを求めようとするのです。また、それは子どもだけの恵みで、多くの場合、大人になるとともに失われてしまうものですからね……ひとたび子どもでなくなると、とても長いあいだ苦しまなければ、そこへ戻ることはできません。夜の果てに、まったく新しい曙の光を見出すようなものです。このわたしにしても、はたして子どもに戻れたと言えるでしょうか」⁽¹⁹⁾

〈子どもの心〉を失うことは、ベルナノスにとって、ほとんど原罪に等しい。わたしたちは、人間が不可避免的に負った罪ゆえに、子どもるときさうであった自分、〈神の子〉としての真の自己、真の存在から引き離され、自分の表面で、ほとんど非現実の自己、虚妄の存在として生きることが余儀なくされている。

わたしたちはあのかたが望まれることのすべてを望むが、自分がそれを望んでいることをわたしたちは知らない。わたしたちは知らないのだ。わたしたちは、罪ゆえに、自分の表面で生き、死のときにしか自分のなかに帰らない。あのかたがわたしたちを待っているのはそこだ。⁽²⁰⁾

〈子どもの心〉を失うとき、わたしたちは真の希望を失う。すなわち、神の愛のなかにあつて、真の自己として全き生を生きる、その可能性を失ってしまうのだ。

以上のように、子ども時代とは、また子どもであるとは、ベルナノスにとって、単なる文学上の事柄ではない。それは、彼の人生のすべて、彼の存在理由そのものであった。

わたしの人生などどうでもよい！ わたしが望むのは、ただ、それが少年だったころのわたしに最後まで忠実であつてほしいということだ。そう、わたしにそなわる誇り、わずかばかりの勇氣、わたしはそれを、今日の私にとつては神秘的なものとなつたあの存在から、受け取っている。⁽²¹⁾

ベルナノスは、自分の子ども時代をみずからの文学の源泉とし、素材とするという以上に、「かつて自分がそうであつた子ども」にたいして身の証を立てるために、作品を書くのである。

わたしは自分が誰のために書いているのか知らないが、なぜ書くかは知っている。身の証を立てるためである。誰にたいしてかかって？ 前にも言ったはずだが、滑稽さを承知でもう一度言おう。それは、かつて自分がそうであつた少年にたいしてなのだ。(22)

今の自分はもう子どもではなく、子どもの心をすでに失つてしまつている。けれども、子ども時代との絆はすっかり切れているわけではない。それどころか、今の自分は、子ども時代との関係においてしか、より正確に言えば、子どもであつたかつての自分との関係においてしか、みずからの存在を規定し得ないのだ。

わたしのごく平凡な生活は、残念ながら、もはや子ども時代のそれではない。わたしは子ども時代をすでに失つてしまつている。聖性によつてしか、それを取り戻すことはできない。だが、子ども時代の雰囲気だけは今にとどまつていて、あのころのすばらしい無為のなかに戻ることはできる。どうかわたしのために祈つていただきたい。子どもの頃の純粋さはすでに失つてしまつたが、わたしも生まれつきの素朴さによつて、今なおあの時代とつながつていようと思えるのだから。だが、その絆が切れてしまつたら、いったいわたしはどうなるのか。(23)

このように、ベルナノスの文字は、みずからの子ども時代との内的対話であつたとと言えるが、それは、人生に疲れた失意の大人が失われた樂園に帰りたいと願う、いわば子宮内回帰の趣味とは何の関係もない。ベルナノスにとつて、子ども時代においてわたしたちがそうであつた存在、「かつて子どもという名で呼ばれた存在」こそ「真実の存在」なのであり、それゆえに、子ども時代の対話とは、そのまま「真のわたしたち自身である唯一の存在、わたしたち

の人間性をなし、わたしたちの使命の支えとなる存在」⁽²⁴⁾との対話ということになる。

サンIIテグジュペリ

サンIIテグジュペリが子ども時代に強くこだわり、子ども時代をみずからの文学創造の源泉としているのも、ベルナノスとまったく同じ理由からである。

子ども時代、誰もがそこから出てきた広大な領域！ わたしはどこに属するか？ わたしは子ども時代に属する。ひとがひとつの国に属するように、わたしは子ども時代に属する。⁽²⁵⁾

わたしは思い出す。子ども時代の遊びのことを、わたしたちが神々を住まわせていた、ほの暗い、また金色の庭園のことを。全部を知り尽くすこともできなければ、全部を踏査することもできなかった一キロ四方から、わたしたちが引き出していた無辺際のある王国のことを。わたしたちは閉ざされた文明を形作っていた。ここでは、一步一步に味わいがあった。ここでは、それぞれの事物に、他のどこにも許されない意味があった。やがて大人になり、別の掟にしたがって生きるようになったとき、子ども時代の陰に満ちたあの魔法の庭園、あの凍てついた庭園、燃え上がる庭園から、いったい何が残っているだろうか？ 今そこに戻り、絶望に近い思いをいだきながら、灰色の石を積んだ低い塀にそって歩くとき、そんな囲いのなかに、かつて自分にとって無限をなしていた一個の世界が封じこめられていたことに気づいて驚き、そして理解する。自分とはや、この無限のなかに戻ることとはできないのだ、と。なぜなら、戻らなければならないのは、遊びのなかであって、庭園のなかにはないのだから。⁽²⁶⁾

サン＝テグジュペリがみずからの子ども時代に無限を感じるのは、そこにわたしたちを在らしめ、生かす超越的作用が働いているからである。子ども時代の世界には「一歩一歩に味わいがあり」、「それぞれの事物に、他のどこにも許されない意味があった」のも、その世界のなかのひとつひとつの事物が、まさに一瞬一瞬の創造によって、かけがえのない唯一無二の存在として、在らしめられ、生かされているからである。ところが、わたしたちは大人になることによつて、この魔法の庭園から締め出されてしまう。それは、すでに見たように、わたしたちが絶対の主体となることによつて、すべての存在が絶対の主体である自己の対象、すなわち外部世界に客体として存在する〈物〉に変質してしまうからである。絶対の主体となつたわたしたちには、あの魔法の庭園に戻ることはできない。その庭園はすでに閉ざされているのだ。わたしたちがそこに見出すのは、ただかか一キロ四方の何の変哲もない物理空間ではない。

サン＝テグジュペリは、わたしたちを在らしめ、生かす超越的働きのことを〈現存〉(presence)と呼んでいる。わたしたちを在らしめ、生かすこの働きこそ、究極の实在、真の現実だからである。またこの〈現存〉が支配する世界、わたしたちを在らしめ、生かす働きの隅々まで及んでいる場のことを〈拡がり〉(étendue)と呼んでいる。〈拡がり〉こそ、眞実の世界、わたしたちが生きるべき世界、そしてわたしたちがもともとそこに生きているはずの世界である。〈拡がり〉はまた、愛の世界でもある。わたしたちを在らしめ、生かしている超越的働きは、わたしたちに何ひとつ見返りを求めることなく、ひたすらなる愛、わたしたちを在らしめたい、生かしたいという純粹な意志によつて、わたしたちを在らしめ、生かしているからである。わたしたちが存在し、生きているとは、そうした愛の働きのなかにあるということにほかならない。それゆえに、わたしたちのうちで「ふとした偶然によつて愛が目覚めると」すぐにも、わたしたちは自分がこの〈拡がり〉のなかにいることに気づく。

わたしは〈拡がり〉の感覚を失ってしまった。わたしには〈拡がり〉が見えない。しかし、それにしたがる望のようなものはある。今のわたしは、すべての人間が抱くあらゆる渴望を測る共通の尺度に触れているように思われる。

ふとした偶然によって愛が目覚めると、人間の内部で、すべてがこの愛にもとづいて秩序づけられる。愛は人間に〈拡がり〉の感情をもたらしてくれるのだ。サハラ砂漠に住んでいたころ、夜、わたしたちのたき火のまわりに突然アラブ人が姿を現わして、遠い匪賊の脅威を告げ知らせると、砂漠は結び合わされ、ひとつの意味を帯びるのだった。それらの使者たちが砂漠の〈拡がり〉を築き上げてくれたからだ。美しい曲であるなら、音楽を聴く場合も同じである。古い戸棚のなんでもない匂いがさまざまに思いつく出をひとつに結びつけてくれる場合も同じだ。心を強く打つもの、それが〈拡がり〉の感情である。

だがわたしは、人間にかかわるものは、何もかも数えられないし、測ることもできないことを理解している。真の〈拡がり〉は、目にはまったく見えず、精神だけに与えられるのだ。⁽²⁷⁾

サン・テグジュペリは、「目にはまったく見えず、精神だけに与えられる」〈拡がり〉のなかに入り、〈現存〉の働きに触れることが、人間を真に人間たらしめるのだと言う。

祈りを捧げるドミニコ会修道士の内面には、濃密な〈現存〉がある。そんなふうに、じつとひれ伏していると、き以上に、この修道士が人間であることはない。「……」同様に、素描をまえに黙り込んだまま身じろぎもしないセザンヌも、計り知れないほどの〈現存〉の濃密さを体現している。こうやって沈黙のなかで絵に向き合い思索

をめぐらしているとき以上に、セザンヌが人間であることはない。このとき、画家にとつての画布は、海よりも広大なものとなる。

子ども時代の館によつてもたらされる〈拡がり〉〔…〕詩によつて広がる〈拡がり〉、こういったものはすべて、文明だけが与えてくれる、繊細でかけがえのない財産の数々だ。というのも、〈拡がり〉は、目のためではなく、精神のためのものであり、言葉によつてはじめて創り出されるものだからだ。⁽²⁸⁾

わたしたちが誰かを真に愛し得るのも、また誰かと真の友情で結ばれるのも、〈拡がり〉においてだけである。〈拡がり〉とは愛の世界であり、その愛のなかに入り、その愛に従うことによつて、わたしたちは真に他者を愛することができるといふのも、〈拡がり〉に〈おいて〉、わたしたち人間を含めたすべての存在は、もともと愛によつて結び付けられているのである。

あなたがたの友愛にしても、あなたがたはそれを、自分よりも大きなもののなかにしか見出すことはできないでしょう。なぜならひとは、何かに〈おいて〉兄弟なのですから。ひとはそのまま兄弟であるのではありません。人間たちは自分にひとつの絆を見出すことを渴望しています。⁽²⁹⁾

ここでいう「自分よりも大きなもの」とは〈拡がり〉を指している。人間は、〈拡がり〉に〈おいて〉のみ、真の兄弟であり得る。〈拡がり〉とは、愛そのものである神の支配する世界、つまりは愛の「磁場」にほかならないからである。

愛にしても、また友情にしても、ひとりあなた「神」のうちのみ、真の意味で結ばれるのです。ただあなたの沈黙を通してのみ、それらに近づくことをお許しになるのも、あなたのご意志にはかなりません。(30)

人間とは、磁場のなかにおいてしか価値のないものである。人間とは、自分のうちに宿す神々、自分と他者を支配する神々を通じてしか、交わりにいたることができない存在なのである。(31)

このように、わたしたちを在らしめ、生かす超越的働きの支配する〈拡がり〉とは、純粹なる愛、無償の愛の世界であるが、わたしたちは大人のままでは、つまり絶対の主体のままでは、この世界に入ることはできない。大人のまま、絶対の主体のままでは、わたしたちはすべてのものを、さらには世界そのものをも、自分の外部に存在する対象、しかも自分の利害の対象として捉えてしまうからである。この世界に入るには（とより、戻るには）、わたしたち自身が純粹な愛、無償の愛を実践しなければならぬ、つまり、ひたすら自分を与えなければならぬ。それによつてはじめて、自分を閉じ込めている絶対の主体性という牢獄の壁を打ち砕き、愛の磁場のなかに入ることができるのだ。

あなたがた自身よりも大きな存在、そしてそれが存在することで、今度はあなたがたを豊かにするだろう存在の構築、そのような存在を築き上げる方法はひとつしかありません。「…」その秘訣とは、つまり犠牲です。わたしが言う犠牲とは、生活上の富の放棄も、贖罪のための苦行も意味しません。わたしの言う犠牲とは無償の贈与を意味します。つまり、見返りとしてなにもも要求しない贈与です。あなたがたを築き上げるのは、あなたがたが受け取るものではありません。それはあなたがたが与えるものです。(32)

ここで言う「大きな存在」もまた、〈拡がり〉を指している。〈拡がり〉に戻るには、わたしたち自身が、大人であること、絶対の主体であることをやめ、無償の贈与、純粋な愛を實踐することを通じて、〈拡がり〉をみずからのうちに築き上げなければならない。しかも、無償の贈与、純粋な愛を實踐すること、つまりは自分自身を惜しみなく、ひたすら与えることが、すべてを得ることを意味する。というのも、〈拡がり〉に戻ること、その世界を生きることが、わたしたち人間にとって、生きることの〈すべて〉なのだから。

おのれを与えるとき、おまえが与えた以上のものを受けることが出来る。おまえはなにものでもなかった。しかし、おまえは成りつつあるのだ。⁽³³⁾

真の友情とは尽きることはないものである。多くを与えれば与えるほど、ますます多くがおまえに残るようになる。真の泉に行つてその水を汲むならば、汲めば汲むほど、泉は多くを与えてくれる。⁽³⁴⁾

*

サン＝テグジュペリが最晩年に書いた『星の王子さま』は、まさに〈拡がり〉を究極の主題とした物語である。「大切なことは目に見えない」——作品中、何度も繰り返される有名な言葉だが、ここで言われている目に見えない「大切なこと」とは〈拡がり〉にほかならない。

小惑星にたったひとり住むひとりの王子が地球を訪れる物語。だが王子は、普通そう思われているように、あ

どけなく純真な子どもの化身ではない。もちろん、子どもの心、純粋な心をすっかり失ってはいないが、彼もまた、すでになかば大人になっている。つまり、みずからを絶対の主体とし、自分以外の存在を自分の利害の対象とみなす心をすでに持つてしまっているのだ。

どこからか自分の星に飛んできた種が芽を出し、成長し、美しい花が咲いたとき、王子は彼女を愛さずにはいられず、献身的に世話をした。しかし、気むずかしく、わがままな彼女の言動に心を傷つけられた王子は、自分の星から逃げ出してしまふ。王子は、のちにそのことを後悔して、つぎのように言っている。

「あの花の言うことを、ぼくは聞いちゃいけなかったんだ。〔…〕ぼくはあのころ、なんにも分かっていなかった！言葉じゃなくて、してくれたことで、あの花を見るべきだった。あの花はぼくをいい香りですつんでくれたし、ぼくの星を明るくしてくれたんだ。ぼくは、逃げ出したりしちゃいけなかった！」⁽³⁵⁾

花のわがままな言動に王子の心が傷ついたのも、そしてそのことに耐えきれなかったのも、結局のところ、王子の花にたいする愛が、純粋な愛、無償の愛ではなく、見返りを求める愛、自分が相手を愛するだけ、相手にも自分を愛し返してほしいと願う愛だったからである。王子の愛に、みずからを絶対の主体とする自己中心性が潜んでいことがさらにはつきりするのは、彼が地球に来て、自分の星に残してきた花とそっくりの花がひとつの庭だけで五千も咲いているのを見たときのことである。王子はすっかり驚いてしまふが、それは、あの花が自分はこの世にたった一輪しかない花だと自慢し、王子はそれをすっかり信じていたからである。

「ぼくはこの世に一輪だけの、宝のような花を持っているつもりでいたけど、ほんとうは、ただのありふれた

バラだった。あとは、ぼくのひさままでの高さの火山が三つ、しかもそのひとつはたぶん永久に消えたままだ。そんなものだけじゃ、ぼくははりっぱな王子になれないよ……」そうして王子さまは、草の上につつぷして、泣いた。⁽³⁶⁾

王子は、この世に一輪だけの宝のような花を持っているつもりだった。それがどこにも咲いているごくありふれた花でしかないことを知って、強い衝撃を受けたのだが、このことよって明らかになるのは、王子があの花を自分の所有物と思っていたということである。つまり、王子は自分では気づかなくとも、絶対の主体として花を自分の所有の対象とみなしていたのだ。

そこにキツネが現われる。悲しみに打ちひしがれた王子は、キツネにいっしょに遊んでくれと頼む。ところが、キツネは「きみとは遊べない。まだ飼いならざれていないから」と断る。王子が「へ飼いならず」ってどういふこと」と尋ねると、キツネは「へ絆を結ぶ」といふことだよ」と答え、さらにつぎのように言う。

「きみはまだ、ぼくにとつて、ほかの十万の男の子となにも変わらない男の子だ。だからぼくは、べつにきみがいなくてもいい。きみも、べつにぼくがいなくてもいい。きみにとつてもぼくは、ほかの十万のキツネとなんの変わりもない。でも、もしきみがぼくを飼いならしてくれたら、ぼくらは互いに、なくてはならない存在になる。きみはぼくにとつて、世界でひとりだけの人になる。ぼくもきみにとつて、世界で一匹だけのキツネになる

……」⁽³⁷⁾

それにしても、「飼いならず」、「絆を結ぶ」とは、どういうことか。もちろん、相手と何らかの関係を結ぶことではあるが、それはどういう関係なのか。どういう関係ならば、互いが互いに「なくてはならない存在」、「世界で

ひとりだけの人」になるのか。

キツネはさらにつきのよう言う。

『ぼくの暮らしは単調だ。ぼくがニワトリを追いかける、そのぼくを人間が追いかける。ニワトリはどれもみんな似たり寄ったりだし、人間もみんな似たり寄ったりだ。だからぼくは、ちよつとうんざりしている』⁽³⁸⁾

キツネがニワトリを追いかける、そのキツネを人間が追いかける、というのも切実な関係である。それはまさに、生活がかかっている、さらには命がかかっている関係である。とはいえ、その関係はあくまで利害関係にすぎず、そして利害関係においては、それがどんなに切実な関係であろうとも、互いが互いにかけてがえのない存在、なくてはならない存在にはけつしてなり得ない。自分の欲望、あるいは必要を満たしてくれるかぎり、相手は誰でもよいからである。飢えたキツネにとつて一羽のニワトリを捕まえられるか否かは命にかかわる問題ともなり得るが、そのニワトリは特定のニワトリである必要はない。つまり、食料としてのニワトリはいくらでも取り換えがきく。だからこそ、いかに切実な関係であっても、それが利害関係でしかないとき、「ニワトリはどれもみんな似たり寄ったりだし、人間もみんな似たり寄ったりだ。だからぼくは、ちよつとうんざりしている」ということになる。

それゆえ、キツネの言う「飼いならす」、「絆を結ぶ」というのは、利害関係とはまったく違った関係性に入るということでなければなるまい。それを愛の関係性と言つてもよいが、その愛は、相手を所有したいという愛ではもちろんなく、相互愛、すなわち自分が相手を愛するだけ相手からも愛されたいということですらない。そもそも、王子はそうした愛に挫折したのであり、のちに「ほんとうに愛するすべを知らなかった」と言っているように、所有愛も相互愛も、ほんとうの愛、真実の愛ではないのだ。

なぜ所有愛も相互愛もほんとうの愛ではないのか。それは、いずれにおいも、愛する当人が絶対の主体となつて
 いるからである。当人が絶対の主体の立場に立つかぎり、当人はどう考えようと、相手はほんとうの意味でかけが
 えのない存在、取り換えのきかない存在ではない。王子は、たしかにバラをこの世にたつた一輪しかないと
 愛していた。しかし王子は（すくなくとも絶対の主体としての王子は）、「この世にたつた一輪しかない」という価
 値を所有することを喜び、また誇つていたのであつて、バラ自身を真に愛していたのではなかつた。だからこそ、
 あのバラが、「この世にたつた一輪しかない」どころか、どこにもあるごくありふれた花でしかないと知つたど
 きに、王子は大きな喪失感を味わつたのである。そうした喪失感を味わつたこと自体、彼が花を自分の所有物と見
 なしていたことを物語っている。そして所有物であるかぎり、いくらでも取り換えがきく。

このように見てくれば、キツネの言う「飼いならず」、「絆を結ぶ」というのは、何よりもまず、みずからの絶対
 の主体性そのものを否定することであることが推測されよう。じつさい、キツネの教えを受けた王子は、バラたち
 のところに行つて、つぎのように言っている。

「きみたちは美しい。でも外見だけで、中身はからつぽだ。きみたちのためには死ねない。もちろんぼくのバ
 ラだつて、通りすがりの人が見れば、きみたちと同じだと思つだろう。でもあのバラだけ、彼女だけが、きみた
 ちぜんぶよりもたいせつだ。ぼくが水をやったのは、あのバラだもの。ガラスのおおいをかけてやったのも、あ
 のバラだもの。ついたてで守つてやったのも、毛虫を「…」やつつけてやったのも、文句を言つたり自慢したり、
 ときには黙りこんだりするのにまで、耳をかたむけてやったのも」⁽³⁹⁾

「飼いならず」、「絆を結ぶ」というのは、このように、自分を無にして相手に奉仕することである。自分自身を相

手に捧げ、あるがままの相手をそっくり受け入れることである。それを裏つける形で、キツネはつぎのように言う。

「きみのバラをかけがえのないものにしたのは、きみがバラのために費やした時間だったんだ」⁽⁴⁰⁾

相手のために時間を費やすとは、ずっと相手のそばにいて、相手を気遣い、世話すること、要するに自分自身を費やすこと、自分を相手に与えること、自分を無にして、あるがままの相手を全面的に受け入れることである。キツネは、つぎのように付け加える。

「人間たちは、こういう真理を忘れてしまった。でも、きみは忘れちゃいけない。きみは、飼いならしたものの、絆を結んだものには、永遠に責任を持つんだ。きみには、きみのバラに責任がある」⁽⁴¹⁾

「飼いならしたものの、絆を結んだものには、永遠に責任を持つ」とは、相手がどのような態度を取るかにかかわらず、たとえ相手が自分を裏切ったり、自分に害を加えたりしたとしても、それでもなお、一方的な責任を持つということと、つまり、何ひとつ見返りを求めることなく、自分をどこまでも与え尽くす、ということであろう。それはまさに、絶対の主体性を完全に放棄するということであり、同じことであるが、自分が純粋な受容者になり、相手を無条件で全面的に受け入れることである。

しかし、絶対の主体性を放棄し、純粋な受容者になり、相手を無条件で全面的に受け入れることによって、どうして相手が自分にとってかけがえのない存在、唯一無二の存在となるのか。わたしたち人間に、ひとりの他者がかげがえのない存在、唯一無二の存在とする力があるとも言えるのだろうか。もちろん、わたしたちにはそんな力は

ない。

じつは、わたしたち自身も含め、すべての人間、この世にありとあらゆるものは、もともと、かけがえない存在、唯一無二の存在としてあるのだ。そうした真実をわたしたちの目に見えなくしているのは、つまり、わたしたちにとつて、あらゆる人間、あらゆるものをかけがえのある存在、どこにでもあるありふれた存在、単なる物たらしめているのは、わたしたち自身の絶対の主体性、自分以外のすべてのものを外部の対象としてしまう自己中心性それ自体なのである。それゆえ、わたしたちが絶対の主体性、自己中心性を捨て去れば、すなわち、自分を与え尽くし、相手を全面的に受け入れるならば、相手はおのずから、かけがえのない存在、唯一無二の存在として立ち現われてくる。しかもそのとき、当の相手ばかりでなく、自分自身を含め、あらゆるものが、かけがえのない存在、唯一無二の存在として立ち現われてくるのだ。かくして、すべてのものが生きた存在となり、世界全体が瑞々しく蘇る。その世界こそ、サン＝テグジュペリの言う〈拡がり〉にほかならない。

キツネは、「ニワトリはどれもみんな似たり寄ったりだし、人間もみんな似たり寄ったりだ。だからぼくは、ちよつとうんざりしている」と言つたあと、つぎのように言っている。

「でも、もしきみがぼくを飼いならしてくれたら、ぼくの暮らしは急に陽が差したようになる。ぼくは、ほかの誰ともちがうきみの足音が、分かるようになる。ほかの足音だったら、ぼくは地面にもぐつてかくれてしまう。でもきみの足音は、音楽みたいに、ぼくを巢のそとへ誘い出す。それに、ほら！ むこうに麦畑が見えるだろう？ ぼくはパンを食べないから、小麦にはなんの用もない。麦畑を見ても、なんにも心に浮かばない。それはさびしいことさ！ でもきみは、金色の髪をしているね。そのきみがぼくを飼いならしてくれたら、すてきだろうなあ！ 金色に輝く小麦を見ただけで、ぼくはきみを思い出すようになる。麦畑をわたつていく風の音まで好きに

なる……」(42)

このように、誰であれ、ひとりの人間（もちろん人間以外のもの、たとえばキツネでも、ぼろぎれの人形でもよいわけだが）を飼いならし、その人間と絆を結ぶならば、その人間のみならず、あらゆるものがかけがえのない唯一無二の存在となるとともに、自分がそのなかに生きている世界全体が、「急に陽が差したように」、明るく生き生きとしてきて、「麦畑をわたっていく風の音まで好きになる」。こうして、世界全体が〈拡がり〉に変貌するのだ。

わたしたちは、ひとりの人間を飼いならすとき、つまり自分の絶対の主体性、自己中心性を捨て去り、純粹な受容者となって、あるがままの相手があるがままに受け入れるとき、それと同時に、あるがままの世界全体があるがままに受け入れてしまうのである。そのように、誰かを、あるいは何かを、ほんとうに愛するとき、つまり見返りを求めない無償の愛で愛するとき、世界全体が美しく変貌する。しかも、そのように美しく変貌した世界とは、わたしたちがもともとそこに生きている世界なのだ。

『星の王子さま』のなかでも、もっとも美しいつぎの場面で語られているのも、まさにそのことである。語り手の「ぼく」と王子は、砂漠のまんなかで、水を手に入れるために、あてもなく井戸を探している。

王子さまは疲れてしまい、すわりこんだ。そこでぼくも、そばにすわった。しばらく黙ってから、王子さまはまた言った。

「星空が美しいのは、ここからは見えない花が、どこかで一輪咲いているからだよ……」

ぼくは「ああ、そうだね」と答えると、あとはもうなにも言わずに、月に照らされたやわらかな砂の起伏を見つめた。

「砂漠って、美しいね」王子さまが、ぽつりと言い足した……

それはほんとうだった。ぼくはずっと砂漠が好きだった。ぼくたちはなだらかな砂の丘にすわっていた。あたり一面、なにも見えないし、なにも聞こえない。それでも、その静けさのなかで、なにかがひっそり光っている……

「砂漠が美しいのは」王子さまが言った。「どこかに井戸を、ひとつ隠しているからだよ……」

このとき不意に、ぼくはなぜ砂漠が不思議な光を放つのがわかった。ぼくは子どものころ、古い家に住んでいた。その家のどこかに宝物が埋められているという言い伝えがあった。もちろん、誰もそれを見つけなかったし、さがそうともしなかつたろう。でもそれが、家全体に不思議な魔法をかけていた。ぼくの家は、その見えな
い中心部の奥に、秘密をひとつかくしていたわけだ……

「そうだね」ぼくは王子さまに言った。「家でも、星でも、砂漠でも、それを美しくしているものは、目に見えないのさ！」⁽⁴³⁾

「家でも、星でも、砂漠でも、それを美しくしている」「目に見えない」ものとは、誰かを、何かを、ほんとうに愛する心だと言ってもよいだろう。つまり、自分を無にして、相手があるがままに全面的に受け入れる愛。しかし、厳密に言えば、そのような人間の愛そのものが、相手を、そして世界全体を、美しく変貌させるわけではない。世界は、そして世界にあるあらゆるものは、もともと美しいのだ。その美しさを見えなくしているのは、ほかでもなく、わたしたち自身の絶対の主体性、自己中心性である。絶対の主体としてのわたしたちの自己は、人間、他者を含め、あらゆるものを、さらには世界全体を自分の利害の対象としてしまう。そして、単なる利害の対象となったものは、人間であれ、他の生物であれ、すべてのいのちを失ったかけがえのある〈物〉に化してしまっている。だが、そうし

ていのちを失うのは対象物だけではない。絶対の主体としてのわたし自身も、ほんとうのいのちを失っている、生きながらにして死んでいるのだ。自分は生きていと思うていても、わたしたちを動かす、駆り立てているのは、対象としての物を所有し、支配し、管理し、操作しようとする欲望、つまりは〈力への意志〉だけである。王子が地球に来るまえに訪れた「大人の星」の住人たち、すなわち、王さま、うぬぼれ屋、酔っ払い、ビジネスマン、点灯夫、地理学者、いずれも、ほんとうのいのちを失い、〈力への意志〉に翻弄される大人たちの戯画にほかならない。

こうして王子は、星に残してきたあのバラが、もともとかけがえのない存在、唯一無二の存在であったことを知る。それはもちろん、彼女がこの世にたったひとつしかない珍しい花だからではない。王子自身もそれまで気づいていなかったが、ふたりはともに〈拵がり〉のなかに生きていたのであり、そこに生きることにおいて、すでにふたりは互いにかけてがえのない存在、唯一無二の存在だったのだ。キツネの教えによって王子が知ったのは、まさにそのことである。キツネの言う「飼いならず」「絆を結ぶ」とは、相手に自分を与えること、自分の絶対の主体性、自己中心性を無にし、純粋な受容者として、あるがままの相手があるがままに受け入れるということである。そのことが、そしてそのことだけが、相手のかけがえのなき、唯一無二性を知るとともに、自分自身もまた、〈拵がり〉というすべてのものがかけがえのない唯一無二の存在としてある世界、純粋な愛の世界に生きていることを知り、またじっさいにその世界に生きるための唯一の方法なのである。

地球を去って、バラとともに生きるために自分の星に帰っていくまえに、王子が「ぼく」にしようと思ったプレゼントとは、まさにこの知恵を「ぼく」に伝えることであつた。

「夜になったら星を見てね。ぼくの星は小さすぎて、どこにあるのか教えられないけど。でもそのほうがいいんだ。ぼくの星は、夜空いっぱい星のなかの、どれかひとつになるものね。そうしたらきみは、夜空ぜんぶの

星を見るのが好きになるだろう……ぜんぶの星が、きみの友だちになるだろう。今からきみに、贈り物をあげるね……」

王子さまは、また笑った。

「ああ！ きみの笑い声を聞くの、大好きだ！」

「そう、これがぼくの贈り物だよ……あの水のお礼さ……」

「どういうこと？」

「ひとはみんな、それぞれ違った星を持っている。旅をする人たちなら、星は案内役だ。そうでない人たちなら、ただのちっちゃな光、学者たちにとっては研究するものだし、ぼくが会ったビジネスマンにとっては、金でできているものだった。でも、どの星も口をつぐんでいる。だからきみには、誰も持つてないような星をあげるよ……」

「どういうこと？」

「きみが星空を見あげると、そのどれかひとつにぼくが住んでいて、そのどれかひとつでぼくが笑っているから、きみには、星という星が、ぜんぶ笑っているみたいになるってことさ。だから、笑う星たちがきみのものになるんだ！」⁽⁴⁴⁾

王子と「ぼく」は、砂漠のただなかで一週間をともし、互いに相手を飼いならし、絆を結んだ。互いに自分と与え合い、あるがままの相手があるがままに受け入れる関係に入ることによって、互いが互いにかけてえのない存在、唯一無二の存在となった。そしてこのように、誰かを、あるいは何かを純粋に愛することによって、つまり自分の絶対の主体性、自己中心性から自由になり、純粋にして透明な受容者となることによってはじめて、わたしたちはへ

がり」を知り、その世界に入り、その世界を生きることができるようになる。

だが、すでに述べたように、〈拡がり〉とは、じつはわたしたちが本来そこに住んでいる世界、わたしたちの真の故郷としての世界なのである。わたしたちは、誰かをほんとうに愛することによって、つまりは自分自身を与え尽くすことによって、〈拡がり〉に入ることができるのだが、わたしたちは誰もが、子どもの頃、その世界に住んでいたのだ。

このように、わたしたちが子どもの頃そこに住んでいた世界、すなわち〈拡がり〉こそ真実の世界であり、わたしたちはその世界に戻り、そこに住むことによって、はじめてほんとうに生きることができると。わたしたちが人間として、ほんとうのいのち、ほんとうの存在、ほんとうの意味、ほんとうの目的を見出し、それを生きることができるのは、〈拡がり〉に住まい、自分自身が子どもに戻ることによってである。じつは、〈拡がり〉に住まうことと子どもに戻ることは、同じひとつのことである。そうした真実をわたしたちに伝えること、それが死を前にしてサンテグジュペリが『星の王子さま』というかれんで哀切な物語を書いたほんとうの理由である。

子ども時代、子どもであること

最初に見たように、大人の立場から見れば、子どもであることには、マイナスの意味しかない。子どもは、小さく弱い。知識や経験に乏しく、ひとり生きていく力はない。自覚や責任感が希薄で、精神的にも自立していない。子どもは、親に頼り、ひとに依存する存在である。子どもは純真である、無垢である、ということかもしれないが、純真であること、無垢であること自体には積極的な意味はない。それは要するに、知識がない、経験がない、つまりはゼロだ、ということにほかならない。

大人になるとは、大きくなり、強くなることである。親から独立し、ひとの世話にならず、自分の力だけで生きられるようになることである。自立すること、自分を自立自存の存在とみなすこと、自分は自分自身を根拠・根底として生き、存在していると考えること、つまりは絶対の主体となること。

だが、そのように大人になり、自立し、絶対の主体となることによって、忘れてしまう真実、そこから離反してしまう真実、それを裏切ってしまう真実があると、ベルナノスやサン＝テグジュペリは訴える。しかもその真実こそ、彼らの文学創造の核心をなす真実、彼らにとつて生きることのすべてである真実なのである。

その真実とは、わたしたち人間は在らしめられ、生かされているということである。わたしたちの存在、わたしたちのいのち、そしてわたしたちの自己＝「私」そのものもまた、与えられたのであり、しかも、たった今も与えられ続けている。さもなければ、わたしたちは、たちまちにして、存在を奪われ、いのちを奪われ、自己＝「私」を奪われ、まったくの無に帰してしまうだろう。

大人は、絶対の主体となることによって（自分をそうみなすことによって）、まさにこの真実を忘れ、裏切り、この真実から離反してしまう。絶対の主体としての自己にとつて、自分以外のあらゆる存在、さらには世界そのものが主体である自分の対象物となる。そして、自分自身がそれ自体として存在するように、世界のあらゆる存在もまたそれ自体として存在していると考ええる。自分も含め、すべては物として客観的に存在するのであり、それはかつて在らしめられたものでもなく、ましてやたつた今在らしめられつつあるものではない。いのちもその通りで、物同士が複雑に織りなす物理化学作用にほかならず、わたしたちが意識を持ち、またわたしたち自身が自己＝「私」であるのも、そうした物理化学作用の結果であつて、いのちや意識、自己＝「私」を与えられたとか、たつた今与えられ続けているなどはまったく考えられない。しかし、こうしたいわゆる客観的世界、自然科学的世界も、わたしたち人間が絶対の主体となることによって、はじめて成立する世界なのである。

それゆえ逆に、わたしたち自身も含めて、この世のありとあらゆるものが在らしめられ、生かされているという真実を知り得るのは、まだ絶対の主体になっていない、少なくとも絶対の主体になりきれしていない者、すなわち、子どもだということになる。もちろん、子どもであっても、この真実をはっきり自覚しているわけではない。というより、ほとんど無自覚だと言ってもよい。だが、子どもは小さく、弱く、親に頼りきり、ひとに依存しているがゆえに、無自覚のうちにも、自分は在らしめられ、生かされているという事実を受け入れ、そうした世界に生きていくのだ。

子どもだけが、そしてかつて子どもであったことを忘れない人間だけが、知っている真実の世界とは、まさに創造の世界である。わたしたち自身、そして世界のあらゆるものが、たった今、在らしめられ、生かされている。刻一刻、存在を与えられ、いのちを与えられ続けている。それゆえに、この世界に属するあらゆるものは、かけがえない唯一無二の存在である。あらゆるもののひとつひとつが、たった今、無から創造されつつあるからである。わたしたち人間もその通りで、その創造作用は、わたしたち自身、わたしたちの意識、わたしたちの自己、「私」の根底において、たった今も働いている。だからこそ、わたしたちひとりひとりがかけがえない唯一無二の自己、「私」であり、そうした唯一無二の自己、「私」として、ほかの誰とも違う独自の世界を生きている。このように、子どもだけが生きている真実の世界とは、つねに新しく蘇りつつある生きた世界、そしてすべてのものがかけがえない唯一無二性を備えている質的差異の世界、真の意味での多様性の世界である。文学・芸術における真の創造性・独創性は、まさに子どもが生きている世界の創造性、質的差異、多様性に基づいている。ボードレーが「天才とはつまるところ、意のままに取り戻される子ども時代である」と言っているのも、そうした意味であろう。

この世界はまた、愛の世界でもある。そもそも、わたしたちは自分がなぜ存在するか、その理由を知らない。それはまったくの偶然、さらには奇跡としか言えず、逆に存在しない可能性のほうはずっと大きかったはずである。

そんなわたしたちを在らしめ、生かしているのは、ベルナノスも言うように、ひとつの自由意志であるほかない。しかもその自由意志は、わたしたちに何ひとつ要求しない。わたしたちに見返りを求めるでもなく、わたしたちに義務を課すわけでもない。その自由意志がわたしたちを在らしめ、生かしているのは純粋な愛ゆえであり、わたしたちが存在し、生きることを純粋に望むがゆえに、わたしたちを在らしめ、生かしているのであり、そのうえで、わたしたちが存在し、生きていることを純粋に喜んで、全面的に肯定している、ということである。その自由意志の当体は、わたしたちに存在・いのち・自己＝「私」を与えてくれる以上、それ自身が〈存在〉そのもの、〈いのち〉そのもの、〈自己〉＝「私」そのものであるはずである。それゆえ、わたしたちを在らしめ、生かすとは、自身自身を与えることにほかならない。そして自分自身を与えること以上に大きな愛はない。それは究極の愛、絶対の愛であり、この愛こそ、人間の抱く愛を含め、あらゆる愛の起源なのである。わたしたち人間が愛し得るのも、ただこの愛を受け入れ、この愛を生きることよつてである。

このように、子どもが生きている世界は、愛の世界であり、そのなかでは、すべてのものが愛によつて見守られ、愛に包まれている。わたしたちは、この愛の世界にあることによつてはじめて、ほんとうに愛することができる。わたしたちは愛の主体ではなく、愛を自分のものとすることはできない。わたしたちができることは、愛を受け入れること、そして受け入れたその愛を生きることだけである。サン＝テグジュペリが言うように、わたしたち人間が、愛にせよ友情にせよ、真の人間関係を結ぶことができるのは、ただこの愛の世界においてなのだ。しかも、与えられたこの愛を生きることが、わたしたちが生きてあることの究極の目的なのである。この愛はわたしたちを在らしめ、生かしている働きそのものであり、それゆえ、この愛に従うこと、この愛を生きることが、みずからの存在、みずからのいのちを実現すること、つまりは真の自己実現を意味する。

それにしても、現代の世界は、そしてわたしたち現代人は、こうした愛の世界からどれほど遠く離れてしまったことだろうか。それはつまり、わたしたちがすっかり大人になってしまい、それゆえに現代の世界が完全に大人の世界になってしまったからである。大人の世界とは、絶対の主体によって構成される世界である。ところで、絶対の主体の根本特性は「力への意志」である。わたしたちがひとたび絶対の主体になると、みずからの主体性を維持・強化・拡大することが自己目的化されるからである。なぜそういうことになるのか。それは、以下のように説明できるだろう。わたしたちが絶対の主体となるとは、わたしたちを在らしめ、生かしている創造活動を否定することにはかならず、それによって、その創造活動から離反してしまう。ところがじつさいには、わたしたち人間が主体として生きていること自体、その創造活動によってはじめて可能なのであり、その創造活動こそがわたしたちの主体性の根拠・根底なのである。したがって、絶対の主体になるとは、みずからの根拠・根底を奪われることであり、それゆえに絶対の主体は、みずからの根拠・根底を奪われた欠如体にはかならない。とうぜんのことながら、絶対の主体はこの欠如を埋めようとする。もちろん、この欠如はみずからの根拠・根底に立ち戻ることによってしか埋めることはできないのだが、その根拠・根底を否定するところに成立する絶対の主体には、そこに立ち戻る道は閉ざされている。そこで絶対の主体は、外部の力を獲得することによって自己を維持・強化・拡大することで、その欠如を埋めようとする。それが「力への意志」である。絶対の主体としてのわたしたちが、権力、富、社会的地位、名誉、名声を求めてやまないのは、それゆえである。絶対の主体によって構成される現代社会は、かくして「力への意志」同士がせめぎ合う激烈な競争社会となるほかない。もちろん、そうした競争を勝ち抜くことができるのはごくわずかな人間だけである。しかし、敗者たち、弱者たちも、この競争から逃れることはできない。というのも、「力への意志」こそが現代社会の根本原理であって、誰であれ、現代社会に属するかぎり、この原理に従って生きるほかないのだ。

こうした現代の冷酷にして暴力的な競争社会を脱する道を、わたしたちはどこに見出すことができるだろうか。それは、ベルナノスの言う〈子ども心〉、そしてサン＝テグジュペリの言う〈拡がり〉を再認識し、それを取り戻すことをおいてほかにあるまい。

〈付記〉

ベルナノスのテキストはつぎのものを使用した。

Bernanos : *Oeuvres romanesques* (Bibliothèque de la Pléiade), 1961

〃 : *Essais et écrits de combat I* (〃), 1971

〃 : *La liberté pour quoi faire?* (Gallimard), 1953

Albert Béguin : *Bernanos par lui-même* (Seuil), 1971

頁指示のための略号は、それぞれ R、E、L、Bとする。

テキストを訳出するにあたって、『ジョルジュ・ベルナノス著作集』全六巻とアルベール・ベガン著石川宏訳『ベルナノス』（いずれも春秋社刊行）の訳業を参考にさせていただいた。

サン＝テグジュペリのテキストはつぎのものを使用した。

Saint-Exupéry : *Oeuvres complètes I* (Bibliothèque de la Pléiade), 1994

〃 : 〃 II (〃), 1999

頁指示のための略号はSI、SIIとする。

テキストを訳出するにあたって、『サン＝テグジュペリ著作集』（全十二巻、みすず書房）、『星の王子さま』（河野万里子訳、新

潮文庫）、『戦う操縦士』（鈴木雅生訳、光文社古典文庫）の訳業を参
考にさせていただきました。

〈注〉

- (1) Jacques Rivière • Alain-Fournier :
Correspondance, t.I, (Gallimard) p.481
- (2) B,150
- (3) B,176
- (4) SI,780
- (5) SI,780
- (6) André Dhôtel : *Jean Follain* (Seghers) p.49
- (7) Baudelaire : *Oeuvres complètes*, t.II (Bibl. de la Pléiade) p.690
- (8) B,95
- (9) SII,233
- (10) SII,236
- (11) R,1045
- (12) R,1045
- (13) R,553
- (14) R,554
- (15) L,274,276
- (16) R,1158
- (17) R,1157
- (18) E,694
- (19) R,1586
- (20) B,147
- (21) E,404
- (22) E,870
- (23) B,150
- (24) B,40
- (25) SII,158
- (26) SI,235,6
- (27) SII,160
- (28) SII,160,1
- (29) SII,66
- (30) SII,832
- (31) SII,657
- (32) SII,67
- (33) SII,626
- (34) SII,627
- (35) SII,259
- (36) SII,292
- (37) SII,294
- (38) SII,294
- (39) SII,298
- (40) SII,298

(44)(43)(42)(41)

SII,300
SII,294,5
SII,303,4
SII,313